哲學研究　第百五十九號　第十四卷第六册

シエリングの哲學的方法について

赤松元通

一

シエリング哲學の根本特質は一言にて云へば「同一」の體系にあると云ふ事が出來ると思ふ。然し乍ら普通にドイツ觀念論哲學として總括せられるフイヒテ、シエリング、ヘーゲル等の體系も、やはりその根本特質の一として思惟と存在、精神と自然との同一を說き、從つてその限りに於いて廣義に「同一」の體系と云ふ事も出來るであらう。然し乍ら吾々が特にシエリングの哲學を「同一」の體系――吾々は單に彼の一時期(卽ち一八〇〇もしくは一八〇一より一八〇三まで)に對してのみならず、彼の全體系に對してもかゝる名稱を與へ得ると信ずるのである。――と呼ぶ所以のものは、先づ彼の體系に於いては、他のそれに於いてよりも特に此の概念が强調せられ、その體

系の根本核心となつてゐると云ひ得る點にあるのであるが、同時に又吾々は彼の同一が彼の哲學の凡ゆる發展段階に於いて常に直觀、卽ち最も直接なる意識と緊密に結びついてゐると云ふ點に彼の同一の特質を見る事が出來ると思ふのである。

扨て此の論文に於いて吾々は彼の哲學を主として形式的方面、卽ち方法論的方面より考察し、內容的方面は唯だ此れに關係ある限りに於いてのみ考察するに止めたいと思ふ。此の考察に於いて吾々は一面歷史的、むしろ問題史的に彼の哲學思想の發展を顧みつゝ、他面夫々發展段階に於いて出來得る限り體系的考察を爲さうと試みた。かくの如き方法は時に冗漫、もしくは重複に陷る恐れがあると思はれるが――そして本稿の如き蕪雜なるものに於いては特にその弊を著しく暴露してゐる事と思はれるが――然しシエリングの如きその哲學思想に於いて著しき發展段階を有する哲學者の思想を考察する場合に於いては、かゝる方法も止むを得ざるものと云はなければならぬであらう。否純體系的考察はかくの如き場合にはむしろ不可能とさへも考へられる。凡ての生きた思想を取扱ふ場合にも勿論そうであらうが、殊に數次の發展段階を無視してはその本質を捕へ得ない樣な思想家に於いては、その思想の發展を顧みる事なしには如何なる考察も甚だ不完全な、一面的なものとな

るに相違ないと思はれる。ウインデルバントも云ふ樣に*彼の十四卷の全集を統一的體系として解釋せんとする事は非常なる誤であつて此の彼の諸著作は、むしろ一つの優れたる精神が青年期より老年期に至るまで、そして又彼れと共にドイツ哲學が歩んだ所の道を示してゐるのである。

* W. Windelband, Geschichte der neuern Philosophie II. S. 245

扨て最初に此の考察の準備として彼の哲學の一般的特質、彼の哲學の種々の發展段階に於いて、或は無意識に、或は意識的に豫想せられてゐる所の一般的な背景を反省して見やう。先づシエリングの最も早き*著作の一つたる「哲學一般の形式の可能性について。」[Über die Möglichkeit einer Form der Philosophie überhaupt] より後年の所謂積極哲學と呼ばれる神話及啓示の哲學に至るまで彼の終始變らざりし信念は、哲學の出發點としての、又その豫想としての同一的絶對者に對するそれである。絶對者なる觀念は――たとひ各段階に於いてその內容は少ならず異つてゐるとは云へ――決して彼の思想を離れる事の出來なかつたものである。實に彼の全思想の發展は此の絶對者を益〻純化し、益〻深化して行つた偉大なる魂の苦闘の足跡と見る事が出來る。

* 彼の全集の中には此の作よりも尙一年前(一七九三)の神話その他に關する論文が收められてゐるが、然し此れは、餘りに若

き(十八歳)時の作でもあり、後年又彼れが神話を取り扱つたものとの間の問題史的な興味を多少有する外、今の吾々には餘り關係はなく、從つて吾々は此の考察に於いては一七九四の前記の論文――此れも尙若き時の作とは云へ、既に彼の特有なる思想の萠芽を充分に見ることが出來るが故に――より出發しやうと思ふ。

彼の體系は先づ歴史的な關係に於いて、カント及びフイヒテ*の流れを掬める觀念論にして此の「同一」は先づ認識論的方面に於いて思惟と存在、或は表象と對象との同一として現はれ、又形而上學的方面に於いては自然と精神との同一として現はれた。既にカントによつても此の同一は或程度まで確保せられたと云ふ事が出來る。卽ち對象は與へられるのではなくして、吾々の自我の構成する所であるとして對象と表象との同一を主張せんとしたのであるが、然し彼には尙ほ物自體と云ふ概念の爲めに、此の思想の徹底を見なかつたのであるが、フイヒテによつて始めて此の障害が除かれて、遂に此の同一は確立せられ、觀念論は徹底されたのである。シエリングは此の立場に基づき、更に自然、精神の同一なる形而上學的基礎の上にフイヒテによつて殘されたる方面へ進むことが出來たのである。此の同一的絕對者の確信は又絕對的統一の確信である。カントの認識論上の二元論は既にラインホールト等によつて一元的方面へ向けられ始めたが、フイヒテ、シエリングによつて此の道は更に一

層深化せられた。知識の無制約的なる絶對的根本命題を主題とせるシエリングの最初の作に於いても此の傾向を明かに見る事が出來るのである。此の統一的傾向、絶對的統一に對する熱望も又、勿論各段階によつて多少內容上の相違はあるが、卽ち或は一般的、或は個性的、或は有機的統一と變りつゝも、常に體系の背後に働いてゐると見る事が出來るのである。

＊シエリングがフイヒテの弟子であるか否かについては、メディクスは「フイヒ傳」の中で（Medicus, Fichtes Leben S. 106）シエリングはその尤も早き著作に於いても、フイヒテの弟子ではなかつたと主張するに對して、クローナーは（Von Kant bis Hegel I. S. 538.）これは强調しすぎた言表であつて、成程、シエリングの最も初期の作に於いても彼特有の思想の足跡が明かに見られると云ふ點より見るならばメディクスの言は正しいが、然しそれにも拘らずシエリングは疑もなく弟子である。それは、フイヒテがカントの、又ヘーゲルがシエリングの弟子であるといふのと同じ意味に於いて、卽ち獨立的なる弟子（ゼルブスステンディゲル）である。……と述べてゐるが、吾々も此の意見は正當であると信ずる。

次に彼の體系は自由の體系であると見る事が出來る。自由の體系も亦カントによつて切り開かれ、基礎づけられたと考へる事が出來る。批判論の本質は理性の自律にあり、從つてそれは自由の哲學でなければならぬ。然し乍らカントの理性が尙全然對象より獨立でなかつた事に關聯し彼の自律或は自由も又制限せられたるものであると考へられるが＊フイヒテ以後の自由の體系は全く理性の絶對的創造的自

由の體系と考へる事が出來る。此の自由の內容も各段階に於いて變化してゐる事は明かであるが、然し何れに於いても彼の體系が自由の體系であつたと云ふ事に就いては少しも變るところはない。

＊此の點に關しては昭和四年一月、哲學研究所載、拙稿「アウトノミーとヘアウトノミー」參照

次に彼の體系は絕對者の自己認識(自覺)の體系であると云ふ事が出來る。カントに於ける自覺(先驗的統覺の自覺)は勿論、超個人的自我の自覺であるが、尙ほ思惟我、知的自我であつたと云ふ事が出來るがシエリングに於いては無制約者、或は絕對者そのものゝ自己認識が哲學の原理となつたと考へられる。從つてその自覺は單なる知的自覺と考へられるべきではなく、むしろ絕對的自覺と考へられねばならぬ。かかる絕對的自覺はフイヒテの絕對的自我の働きに於いて始めて見出された。シエリングも此のフイヒテの自覺の本質を捕へて自己の出發點とし、＊絕對者の本質、若しくは根本力を意志に於いて認めんとした。そして此の思想も以後積極哲學の時期に至るまでも――自覺の意味は勿論異つて行つたとは云へ――明かに見られる所のものである。

＊一七九四年の「哲學の形式の可能性について」に既にフイヒテの「Ich bin」の自覺について論じてゐる。尙、シエリングは初

は絶對者をフイヒテと共に自我と呼んだが、後、フイヒテの立場を遠かるに從つて「同一」「無差別」などと呼び自我とは呼ばなくなつた。然しその爲めに自覺なる作用が全然失はれたと云ふのではない。

尙、以上の思想に密接に關係して彼の體系は生成の體系若しくは發展の體系と考へる事が出來る。此の思想は一七九七年頃より卽ち「Abhandlungen zur Erläuterung des Idealismus der Wissenschaftslehre」や「Ideen zu einer Phil. der Natur」等の作より始めて明かな形に於いて說かれ、そして後期まで繼續するのではあるが、然しそれ以前に於いても萠芽は認める事が出來るのである。世界は無限なる生產再生產に於ける吾々の創造的なる精神に外ならない。自然は精神の發展であり、精神の本性は自覺にあるが故に、自然は卽ち自覺の發展、もしくは歷史に外ならない。自然哲學の對象はかくの如き自然の發展、或は動的過程 (dynamischer Prozess) であり、同じ樣に先驗哲學(知識哲學)の對象も知識、或は精神の發展である。此の場合の發展もしくは生成は勿論經驗的な意味のそれではなくして先驗的な意味のそれである。眞の實在は生產し、再生しつゝ、無意識的に、又意識的に發展する精神である。凡ての眞なる哲學は此の發展の再生、意識に於けるそれの反覆、自然及精神の再構成に外ならない。從つて眞の哲學は必然的に生成的な哲學、世界の精神的再創造、物の生成 genesis の認識、自然及自覺の

歴史となる*のである。

* K. Fischer, Geschichte der neuern Phil. 7. Schelling. 3. Aufl. S. 311

二

扨て次に主として各段階に於ける特殊な方法論的問題について考察しやうと思ふ。先づ最初に彼の哲學上の諸著作は決して統一的に捕捉せらるべきものではなく、偉大なる哲學的精神の一つの發展史と考へられると云ふ事は既に述べた所であるが、此れら諸思想の間の關係は如何に考ふべきであらうか。全く相互に偶然的なものであらうか。それとも必然的なる關係があるのであらうか、斷續的のものであらうか、或は又連續的なものであらうか。

勿論決して偶然的なものではあり得ない。外的影響のみによつて彼の諸體系が發展したと考へられるならば或は偶然的と考へられるでもあらうがシエリングの諸體系を見るに、成程或はプラトー、スピノザ、ライプニツツ、カント、フイヒテ、ヤコービ、等可成り多くの體系によつて影響せられたことは否定し得ないと思はれるが、然し更に深く觀察するならばこれらの影響は決して單に外的、偶然的なものではなくし

て、むしろシエリング自身の内面的な要求に出てゐると云ふ事が明かとなる。凡ての創造的な體系の場合に於いてと同樣に、シエリングの場合に於いても、これらの諸體系は彼の内面の反映として彼自身の體系の中に取り入れられたものと見る事が出來るのである。かくの如く見るならば彼の種々の發展段階に於ける諸體系(若しくは諸思想)の間の關係も、たとひ一見、外面的、偶然的と考へられるも、その間には内面的な必然的關係――外的因果による必然的な關係でなく――が認られと思ふ。而して此の内面的必然關係は卽ち人格的統一に基づく連續的統一であつて、此の内面的連續性あるが故に、たとひ種々の段階に於ける體系の個々の部分に於ける、若しくはそれらの體系そのものゝ間に於ける矛盾、衝突などが認あられるにも拘らず、尙全體としてそこに一なるもの、完き個性的なるものを見出すことが出來るのである。

吾々の此の論文に於ける一つの目的もシエリングの思想發展に於ける各段階の内面的な連續性を――問題、並びにそれを解決せんとした方法の方面を中心として――理解せんとするにあると云ふ事が出來る。此の意味に於いて吾々の方法はメツツガー*の用語を借るならば「歷史的微分的方法 die historische Infinitesimalmethode」として云ひ表はす事が出來るかも知れない。然し問題或は方法の連續性と云ふ事は必

ずしも常に同じ問題或は方法を意識的に卽ち思索の前景に於いて考へ或は取つてゐたと云ふ事に解する必要はない。若しかくの如くに解するならばブラウン**の注意を待つまでもなく明かに連續性を否定しなければならぬであらう。ブラウンはクーノーフイツシヤーが問題の連續性卽同一を主張し、單にそれの解決に於いてのみ發展があると云へるに對して、例へば先驗的觀念論に於いては根源惡の問題は尙ほ前景には現はれてはゐない等の例を擧げて此の主張を無制限には肯定し得ないとしてゐるが、然しブラウンの眞意も此れらの發展、もしくは變化が、決して突然に偶然に起るのではなくして內在的な必然性によつて漸次に起るとする點にあるが故に此の問題の解決は要するに連續性なる概念の明確なる理解にあると思ふ。勿論此の連續性といふ事は、概念的に色々嚴密に規定する事も出來るであらう。例へば數學的に「各所密」の概念によつて、或は「聯接的」なる概念によつて、更には又「極限」「切斷」等の概念によつて說明する事が出來るであらうが、然し今は此れらの問題に觸れずにおきたい。唯然し吾々の信ずる所によれば連續性とは要するに一つの內面的なる創造的原理によつて產出され、貫かれてゐるといふ事であつて、發展の間に連續性があるといふ事、もしくは連續的發展と云ふ事は種々の變化が一つの內面的なる原

る理によつて貫かれつゝ發展するといふ事にすぎない。此の意味に於いては吾々は前にも述べた如く充分に連續性を承認し得ると思ふのである。個々の問題に於いて此の連續性が如何に現はれてゐるかと云ふ事は夫々の部分にゆづり此處には先づ問題及方法の發展に於ける連續性を豫想しなければ彼の思想の完全なる理解には到底達し得ない事を述べておくに止めやう。連續性の理解は勿論同一的な方面と共に特殊的差別的な方面の考察をも必要とする。以下も此の方針のもとに考察を進めて行かうと思ふ。

* W. Metzger, Die Epochen der Schellingschen Phil. von 1795—1802, S. 7.

**O. Braun, Schellings geistige Wandlungen in den Jahren 1800—1810, S. 15

最後にシエリングに對して、彼の體系は本當の體系と稱せらるべきものではない、彼に於いては眞の方法の自覺が無かつた、と云ふ非難*について少しく考へて見たいと思ふ。此の非難を分析して考へて見ればシエリングが無體系的、無方法的と稱せられるのは察するに第一根本原理が確立してゐない事、從つて第二それが絶えず變化してゐると云ふ事、第三彼の體系は斷片的であると云ふ事、第四、哲學的方法が確立してゐないと云ふ事等に歸するであらう。然し乍ら第一の彼の哲學の根本原理が

確立してゐないと云ふ事、卽ち或は「相互作用」を或は「自我」を或は「同一」を或は「無差別」を根本原理としたと云ふ點を單に表面的に見るならば根本原理は絕えず動搖し、確立してゐない樣に思はれるが、然し後に述べる樣に決してそうではなくそれらは內面的に連續しつゝ發展してゐるのである。從つて第一の非難はよく考へて見るならば彼には當らないと思はれる。然らば第二の此の原理が變化してゐる以上は根本原理たるに價しないかと云へば決してそうではない。變化はしてゐても決して偶然的なる變化ではなく、必然的に內面より發展してゐるのであつて、その變化の爲めに、その原理の同一性が失はれる如きものでは決してない。第三に彼の哲學が斷片的であると云ふ事には二つの意味があるであらう。卽ちその一つは作そのものが實際完結してゐない(例へばallgemeine übersicht の中のあるもの、或はDarstellung meines System 等の如き)と云ふ事と他は各期に於いて主として取扱つた對象或は問題が部分的斷片的である(例へば初期に於ける自我、自然哲學に於ける自然、後期に於ける自由又は神など)と云ふ事であるが、これらの事は勿論承認しなければならぬのであるが、然し此の事が無體系的と云ふ事と決して直接に關係を有するものとは思はれない。體系は統一的全體でなければならぬ、斷片的であつてはならぬと云つても決して外

面的な形の上のことではない。外面的には斷片的の如く見ゆるも、それが統一的なる根本原理によつて統一され、貫徹されてゐる限り、全體の一部分であり、充分に體系を代表し得るものであると信ずる。問題は從つてそれらの部分が果たして統一的なる根本原理によつて捕捉され、浸透されてゐるか否かと云ふ點にある。此の點に於いても吾々は、多少の强弱はあれ、彼の諸思想が皆一根本原理に貫かれてゐると信ずるものである。第四の哲學的方法が確定してゐないと云ふ事についても成程彼はヘーゲルの辨證法の如き著明なる方法を持たなかつたと云ひ得るであらうが、然し彼の同一的絶對者の發展の形式として二重性、有極性或は相互作用等による彼特有の客觀化的方法を有してゐたと云ふ事が出來ると思ふ。唯然し彼に於いては此の體系化が反省され、概念化されることが比較的少なく從つて方法論的方面に於いても明確に意識せられず、概念化せられずに殘つた點も甚だ多いと云はなければならぬ。此の點に吾々も彼の體系家としての短所を充分承認しうるのであるが、然し此の短所も他面に於いては、彼が直觀的思索家として、絶えず生命的なるものを捕捉しつゝ、彼の思索をそれに基づけんとする點に於ける彼の長所と密接に結びついてゐる事を見逃すことが出來ないと思ふ。尙此れらの點については本論文に於いて

漸次明かにせられるであらう。要するに體系なる概念を靜的な、固定的な型の意味に解せず、生ける、無限なる創造的な根本的原理に基づく所の、卽ち內面的なる連續的發展をなす所の、全體的統一の意味に解する事が出來るならば、決してシエリング哲學を單なる〝ein system- und methodenloses Räsonieren und Konstruieren〟「體系なき、方法なき合理化及び構成」** と云ふ事も出來ないと思はれる。

* 例へばクローナー等もそうである。

**R. Kroner, Von Kant bis Hegel I S. 537

扨て彼の思想の發展段階の區分については、例へばウインデルバントはスピノザ、フイヒテの影響期を除いて五期に、卽一、自然哲學、二、美的觀念論三、絕對的觀念論四、自由論五、積極哲學に分ち、クーノーフイシャーは一、フイヒテよりの過渡期二、自然哲學三、同一哲學四、宗敎哲學に分つてゐるが、メツガーは、更に一八〇二年までの彼の哲學的發展を四期に分つて第一期一七九五年、第二期一七九七年九八年、第三期一七九九年、一八〇〇年、第四期一八〇一年、二年としてゐるが、勿論細く區分すればそれだけ嚴密となり得るわけであるが、然しかくの如く詳細に區分するとしても、その間には又移り行きの作などもあつて、やはり劃然と區別する事は困難であり、嚴密に云ふなら

ばむしろ一つ一つの作そのものに發展と個性とを認めなければならぬとも云ひ得るであらう。從つて此の考察に於いては大體既に承認せられてゐる分ち方、殊に消極哲學の部分に於いてはメッツガーの區分に從ふつもりであるが、時には此れらに縛られず、出來るだけ自由にその內面的關係を辿つて考察を進めて行きたいと思ふ。

三

シエリングの哲學に對する確信の根本的特質とも云ふべきものは既にも述べた如く絕對的な統一であるが、かゝる思想は彼の最初の作なる「哲學一般の形式の可能性について」に明かに現はれてゐる。

哲學は先づ Wissenschaft でなければならぬ、卽ち一定の形式のもとに一定の內容を持たなければならぬ。然し哲學は單なる學ではなく、凡ての他の學の基礎となるもの、換言すれば哲學の根本命題は他の學の根本命題を基礎づけるものでなければならぬ。卽ち哲學の根本命題はそれ自らは他の如何なるものにも基礎づけられずして、他の凡ての學の根本命題を基礎づけるもの、從つて全く絕對的な根本命題 ein schlechthin absoluter Grundsatz でなければならぬ。かゝる絕對的なる根本命題はその形式も內容も共に制約的である事は出來ない、卽ち全く無制約的でなければならぬ。

而してかくの如き根本命題の、かくの如き形式と內容との結びつきは決して氣髓なものでもなく、又第三者卽ち他の根本原理によるのでもなく、兩者は唯だ內面的必然的に相互に制約されうるのみである。※ 此處に自らによつてのみ立つ所の絕對的なる根本命題の、內容と形式との無制約的なる「相互作用」なる根本思想が明かにされてゐる。卽ち此の無制約的なる相互作用の定立はかゝる根本命題自身の自己自身による絕對的なる定立によつて始めて成立する。此の無制約的相互作用の概念こそ實に彼の最初の作の中心概念である。かくの如く此の論文に於いて最初の出發點となり、又その中心概念となれるものは相互作用といふ一つの抽象的なる關係概念であると云ふ事が出來るが、然し此の相互作用なる概念を分析すれば、先づ反對なるもの、卽兩極端(此の場合に於いては形式と內容)の對立、及び兩者の自らによる統一なる概念を含んでゐる、卽ち前者は後者を、又後者は前者を離れてあるものではない、兩者はむしろ一つの全體をなしてゐるのである。換言すれば反對なるものが一面それ〴〵獨立として云はゞ實體と考へられつゝ、他面更にそれらが因及果として作用するものと考へられるが、然し單に普通の因果の系列の如く一方向的、もしくは一面的ではなくして兩方向、もしくは兩面的に働くと考へられる。換言すればその作用

が絶對的全體として、進む方向と共に又還る方向として、働くものと共に又働かれるものとして卽ち兩者の「同一」として考へられるのである。かく考へれば此の相互作用なる概念の中に既に後に發展せしめらるべき「同一」の概念がひそんでゐると考へる事が出來る。** 相互作用は實に同一性の缺ぐべからざる制約であつて此れは後に有極性 Polarität として明かに意識せられる所のものである。

* Schelling S. W. I S. 93 以下シエリングの引用は彼の息子の編纂になる全集(一八五六—一八六一)の頁つけによる。

** 此の論文に於いては尙「同一性」なる概念は現はれてゐない。唯カントに關係した部分に於いて分析的命題、綜合的命題などに對して同一的命題(イデンチツシエルゼツツ)なる概念があるのみである。而して「自我は自我也」などがかゝる命題として考へられてゐる。

次にシエリングは此處に相互作用なる概念を抽象的に取り上げてゐるが此れは勿論彼の認識論的なる思索の結果と考へる事が出來る。此の概念の背後には勿論形而上學的なる體驗の背景が存してゐる事は見逃すことは出來ない。此の形而上學的なる體驗の背景に於いてかゝる內面的なる相互作用を理解すると云ふ事、此の點にシエリングの哲學の特質が存すると考へる事が出來る。

カントの批判哲學の出發點は認識論にあると云ふ事が出來る。彼は認識論に於いて、形而上學的なる實體概念を漸次に認識論的なる關係概念に消解せしめたが、然

し此の形而上學的な實體概念の體驗の背景は勿論全然棄て去つたのではない。此れに反してシエリング哲學の起點は初めより此の形而上學的なる實體概念の體驗にあつた。此の故に彼は反對に認識の本質として考へられたる無制約的相互作用なる最も高き、最も純化せられた關係概念より形而上學的なる絶對者を取り還さんとする試みを以つて始めた。※簡單に云ふならばカントは實體概念より關係概念へ進んだに反してシエリングは關係概念より實體概念に還らんとした、と云ひ得るであらう。尤もシエリングの場合に於いても認識論的抽象は形而上學的な還元或は具體化の豫想、もしくは必然的なる前階をなしてゐると云ふ事は云ひ得る。然し乍らカントの場合と異る點は後者が認識論と形而上學とを峻別し、形而上學を全く理論的領域以外に於いて認めんとしたのに對して、彼は兩者を獨立なるものとして區別せず認識論的思索の根柢に於いて常に形而上學的なるものを豫想したる點である。かくてその方法に於いても兩者の相違が自ら現はれ、シエリングに於いて關係概念(相互作用)より實體概念の體驗に向ひ、認識論的抽象より形而上學的具體へ進むのは決して自らとは別なる世界、未知の國へ行くのではなく、むしろ深き自己に還り行くのであり、自らの根柢魂の故郷に再び歸るのであるが、カントに於いては關係概

念は唯だ現象の世界の中に閉ぢ込められ、形而上學的なる世界は此れにとつて全くフレムドな世界、質的に異つた世界であつた。從つて認識の世界卽ち現象の世界より、形而上界、叡知界への歸入に於いては自己の根柢へ歸ると云ふ自覺は余程力弱きものとなると云はなければならぬであらう。第三批判の努力は此の點より見て確かに此の自覺の深まりを現はすものと云ふ事が出來ると思ふ。※※

* Vgl. M. Schröter, Der Ausgangspunkt der Metaphysik Shellings S. 24

※※カントの思索をかゝる觀點より觀やうと試みたのが拙稿「アウトノミーとヘアウトノミー」

カントの批判的立場に於いては認識論の出發點は先づ二つに區別して考へる事が出來る。その一つは分析上のもしくは事實上の出發點にして他は論理上の豫想とも云ふべきものである。前者について云ふならばそれは眞なる事實、科學の事實 Faktum der Wissenschaft である。認識論の分析の第一歩は先づ數學、自然科學等が事實上眞として、成立してゐる事より出發し、次に此れが普遍的必然的なる、卽アプリオリなる制約を求める。かくて直觀及範疇の先驗的なる形式が見出された。所でシエリングに於いては初めから認識論と形而上學の區別が除去せられて哲學の出發點は無制約的なる絕對的根本命題であつて、此れは卽ち眞の自我そのものに外ならな

い。絶對的自我は事實上或は分析上の出發點であるのみならず論理上の豫想でもある。卽ち此處に於いては哲學の出發點に於ける區別も單に暫定的なものにすぎない、自我は一面論理的基礎であつて又直ちに自覺の事實である。此の二つの出發點の一である點、從つて又認識論と形而上學とが一つである點、此の點にフイヒテ及シエリング(並にヘーゲル――ヘーゲルとの關係については後に考察しやうと思ふ)のカントとの本質的なる相違があると思はれる。而してフイヒテ及シエリングのかゝる著しき一致にも拘らず、兩者の間の相違も既に此の作に充分現はれてゐると思はれる。それは卽ち兩者の思索の根柢たる「人」そのものにもとづく相違にして、フイヒテの倫理的情熱による奮鬪的態度とシエリングの思辨に徹せんとする靜澄なる觀想的態度にもとづく相違である。かくてフイヒテの體系、從つて又その方法も無限の動的なる、努力的なる過程、辨證的なる發展とならざるを得ない。彼の知識學の第三の根本命題は又無限の綜合への出立點である。然るにシエリングは此の作に於いて、成程フイヒテに從つて第三根本命題を導き出したが、然し彼にあつては此れら三つの命題の統一的關係を定立することによつて當面の問題は解決せられたので*後は更にカントの範疇の演繹に進んでゐるのである。此れらの點より考ふる

にシエリングに於いて最も核心的なるものは依然として「相互作用」である。相互作用は一つの全體である、全體に於いては理念は既に實現され、無限なる過程は完成せられて一つの靜止として體認せられる。此の兩者の區別は又兩者がカントの主要著作に對する關係に於いて尤も明かに見る事が出來る。勿論兩者ともカントの三批判に夫々影響を受けてゐるでもあらうが、その中フイヒテは第一第二、殊に第二批判の精神を、シエリングは第三批判の精神を受けついでゐると考へられるのである。かくの如く兩者の哲學の間には性格的な相違が存すると考へられるのであるが、然し尙方法論上に於ける一致、言ひ換へれば、フイヒテのシエリングに及ぼせる影響を決して無視することは出來ない。卽ち直觀的なる理解、もしくは根本體驗そのものを概念的なる反省に置き代へる所に、或はclassが既にwieを決定してゐたと云ふ點に兩者の本質的なる一致を見ることが出來るのである。尙シエリングの思惟方法について他の哲學者例へばフイヒテ、ヘーゲル等に對してシエリングを抽象的思索に堪えざる單に直觀もしくは想像力の哲學者と見るは決して彼の本質を洞察したものと云ふ事は出來ないと思ふ。勿論シエリングにとつては此の方面は彼の得意の方面ではないとしても、彼の直觀力の深さと共に又抽象力の强さをも充分に認める

事が出來るのである。勿論抽象(或は反省)は彼も云ふ如く、決してそれ自ら目的ではない、單に手段にすぎないものである、そして此れは哲學的思索に於いて缺くべからざるものではあるが、然し分離せるものを合一せんとする眞の哲學的才能と結びついてゐない場合にはむしろ此上なき不幸なる才能と云はなければならぬ。**然し兩者が緊密に結びつける場合には、抽象の力が强く大きければ大きい程、それだけ又直觀が深められて行くのである。彼がラインホールト、その他信仰哲學者などよりも遙かに深く偉大であり得たのは、此の直觀を深く掘り下げ得た所の抽象並に思辨の力强さによると云はなければならぬ。實際彼は彼の最初の作に於いて既に抽象力の强さを示してゐると考へる事が出來る。

* Schelling, I, S. 101

**Schelling, I, S. 139 f. II, s. 13 f.

四

扨て知識の根本制約として求められたるかくの如き無制約的なる絶對者、自我は更に次の作 Vom Ich (1795) に於いて詳細に考察せられた。特にスピノザへの意識的接近に*よつて最初の作に現はれたる統一的要求はます〳〵强調せられた。**此の

作に於いてシェリングの試みた所も「批判哲學の結果を凡ての知識の窮極的なる原理に還元する事に於いて叙述する」と云ふ事であつて此の窮極的な根本原理として現はれたのが卽ち「純粹同一性」である。勿論既にのべた如く「哲學一般の形式の可能性について」に於いても、かかる思想は全然なかつたのではないが――そして萠芽の形に於いて既にひそんでゐることは前に指摘した如くであるが――意識的に原理として定立せられたのは此の作を最初と考へてもよいと思ふ。** 卽ち凡ての人間の知識の根本制約、或は最窮竟者は凡ての知識の實在性の基礎であり、も早や如何なる他の原理によつても基礎づけらるべきではないが故にそれは全く自らによつて存在し自らによつて認識せられるものでなければならぬ。此れに於いては存在の原理と認識もしくは思惟の原理とは一つである。「凡ての實在性の最後の根據は、卽ち唯自らによつてのみ、卽彼の存在によつてのみ思惟することが出來、それが存在(ザイン)する限りに於いてのみ思惟せられる所の或物である、一言にて云へば、それに於いては存在の原理と思惟の原理とが一致するのである。」

* Vom Ich, Vorrede, Schelling I, S. 151, 159

** 例へば Vorrede, I. S. 158

*Schelling, I. S. 177 ff., Also muss die Uform des Ichs reine Identität sein.,,

然し乍ら此の時期の同一性は――同一性たる以上は勿論、主觀的なるものと客觀的なるものとの合一ではあるが*――後の一七九九年以後の同一性と比較するならば、後に明瞭となるであらう樣に、尙余程主觀的であり、一般的であり、抽象的であると云ふ事が出來る。先づ此の時期に於ける同一性は單に唯一な、不變な、自由な、無限なる絕對的なる自我の根源形式であつて、個或は多を全く離れてゐる、と考へられる。勿論同一性なる以上かゝる概念はそのまゝに含まれる事は許されないが、同一性が深められ、具體的となる場合には、必ず何らかの姿に於いて多、若しくは特殊を含んでゐなければならぬと思はれるが、此の場合の同一性にはかゝる自覺は甚だ薄いと云はなければならぬ。卽ち此の時期の特徵たる「自然に對する無關係」Fremdheit gegen die Nature**が此の同一性に於いても見られるのである。

* 一八〇九年の彼の著作集の序に於いて彼自身此の「自我について」の觀念論に關して、特に此の點を注意して單なる主觀的觀念論との區別を强調してゐるが、それだけに又、後の觀念論、卽ち自然哲學を通れる客觀的なるそれに對して此の觀念論が主觀的であることが理解せられるのである。

**Mazger, op. cit., S. 24

次に注意せらるべき特徵は生命の體驗、生きたる現實の把握に對する神祕的情熱

と、冷靜なる主知的要求との交錯である。彼が哲學の本質として考へてゐるものは決して死せる型や概念の技術ではなく、生命そのものゝ捕捉である。哲學の本質はヤコービの言葉を用ふるならば※存在(ダザイン)を露はし(エントヒユツレン)啓示する點にある。言ひ換へれば哲學の最高の功績は抽象的概念を立て、それらより體系を作り上げると云ふことにあるのではない。彼の最後の目的は純粹なる絶對的存在であり、彼の最大なる功績は決して概念に持ち來し說明し開展する事の出來ないもの、要するに解決し得べからざるもの、直接なるもの、單一なるものを露はし、啓示すると云ふ事である。」哲學は人間精神の生ける仕事を葬り去る如き固定せる型(フォルメル)や文字(ブツフシユターベ)にかゝわるべきではなく、それの最高の對象は人間に於いて直接に自らによつてのみ顯はれる所のもの、言ひ換へれば絶對的なる自我(同一性)そのものでなければならぬ。※※

* Schelling. I S. 156, 186 シエリング自身の引用。

**Schelling I. S. 156

かゝる自我は絶對的なるが故に決して客觀となる事の出來ないものである。(Vgl. S. 164, 166) 客觀となる事は物となることであり、物となる事は制約せられると云ふ事に外ならない。(Bedingen = Be-dingen) 從つて自我は客觀的概念によつては決して限

定する事の出來ないものである。單なる概念よりの、絶對的自我の演繹は不可能である、と云ふ事をカントが既に「我は在り」の根源的命題は決して「我は思惟す」の結果でない事を說ける點に於いて暗示してゐる。更に又自我は單なる理念でもあり得ない、むしろ根源的に與へられたるもの、此の場合唯一の可能なる知的直觀に於いて與へられてゐるものである。(Vgl. I. 204)卽ち自我は單なる概念ではない、從つて悟性の働きに於いては勿論到達し得ざる限界である。又單なる理念、單なる當爲と云ふ如きものでもない。然し乍らそれだからとて決して單なる感性的直觀の中に與へられてゐる如きものではない。唯知的直觀の中にのみ見出されるのである。此處に單なる當爲及存在の合一としての自我の眞面目が現はれるのである。かくの如き神祕的主觀的傾向に關する限り彼の此の立場を神祕的主觀主義と名づけることも出來るであらう。

然し乍らかくの如き神祕的なる絶對者への還沒の强調と共に此の作には尙他面、强き合理的傾向が働いてゐるのである。而して此の傾向こそ又此の時期並びに一八〇四年頃までに至る彼の前期哲學、卽ち消極哲學全體に亙れる一特徵と見做すことが出來るのであるが今此の合理的傾向の內面的融合の點を暫らく度外視するな

らばかくの如き神祕的なる、そして存在論的なる傾向に於いて、ベツケルスも主張する*如く既に後期の超理性的實在哲學への萠芽を認めることが出來ると思ふ。

* H. Beckers, Schellings Geistesentwicklung in ihrem inneren Zusammenhang, S. 4

扨て此の合理的傾向は最初の豫想たる思惟と存在との同一、卽ち「絕對者は唯だそれがあることによつてのみ考へられ、又反對に唯だ考へられることによつてのみ在る」と云ふ事に於いて既に含まれてゐるのであるが、更に又次の如き形に於いて現はれてゐる。「人間性を自由にし、客觀的世界の制限をとり去るといふ事は理性の大膽なる仕事である、然し此の大膽なる仕事は決して仕損ずることはあり得ない、と云ふのは人間は彼自身、及彼の力を識れば識る程、偉大となるからである。人間に、彼が何であるかの意識を與へよ、然らば彼は直ちに又彼が如何にあるべきかを學ぶに至るであらう。彼に、彼自身に對する理論的な尊敬を與へよ。實踐的なる尊敬はやがて從ひゆくであらう。」

最後に此の作に於いても、前の作に既に現はれてゐる所の本體論的な傾向と先驗的な傾向、若しくは形而上學的傾向と認識論的傾向が融合したる形に於いてゞはあるが現はれてゐるのを見る事が出來る。一七九四年の作に於いてはそれが「相互作

用」と云ふ關係概念の强調によつて、より强く認識論的色彩を帶びたのであるが「自我について」に於いては無制約者、或は實體としての自我といふ實體的な概念の强調によつてより强く形而上學的、本體論的色彩を帶びたのである。かくの如く自我は著しく本體論的に考へられてゐるとは云へ、批判主義的認識論による、認識の基礎としての先驗的な意味も決して否定する事は出來ない。かくて此の作に於ける絕對者にも當然本體論的、先驗的の二面を有すると考へる事が出來るのであるが、然し本體論的な傾向は彼の前期の發展に於いては此の時期を頂點として漸次衰へて行くが、反對に先驗的傾向はやうやく强まり行くと考へられるのである。先づ次の Philosophische Briefe über Dogmatismus u. Kritizismus, 1795 及 Neue Deduktion des Naturrechts, 1796. に於いては倫理的實踐的な傾向の增大と共に「自由」なる概念がますゝ强く前景に持ち來され發展せしめられるに至つた。勿論、本體論的傾向にある「自我について」に於いても既に自由は充分に意識せられて明かに自我の本質と考へられてゐる。實に「凡ゆる哲學の最初にして最後のものは自由である。」(Vgl. Vom Ich, s. 179, 177) 此の事は翌年の「一般文學雜誌」A. L. Z. の Intelligenzblatt に現はれたるシエリング自身の答辨※に尤もよく見ることが出來る。卽ちそれによれば彼の此の作「自我について」を書ける目

的は「哲學をば、哲學の第一の根本命題に關する不幸なる探究によつて、どうしても陷らざるを得なかつた所の衰弱麻痺より解放し、且つ眞の哲學は唯だ自由なる行動を以つてのみ初まる事が出來、そして此の學の頂點にある抽象的な根本命題は、凡ての哲學的思索の死であると云ふ事を證明するといふ事であつた。…」

* Schelling, I S 242

かくの如く此の作にも自由なる概念が中心になつて居り――そしてその限り批判主義の本質を體認したものと云ふ事が出來るのであるが――此の立場を基にして初めて「スピノザのエチカの對照物（ゲーゲンシュチュック）を建てんとする理念に實在性を與へ」*んとする事も可能となるのであらうと思はれる。此の自由の概念こそ彼によれば眞の哲學としての批判論と獨斷論との兩體系を區別する所の概念である。彼によれば徹底せる體系としては批判論と獨斷論との二つあるのみであつて觀念論を取り乍ら物自體を認める如き、所謂當時のカント學派の如きは決して體系の名に價するものではない。

* Schelling I. S. 159. (Vorrede) 此の希望は以後絶えずシエリングの胸中に動いてゐたと思はれるが、最も外形的に明かに表れたものとしては、此の時とは立場が多少異なるが一八〇一年の「我が體系の叙述」を擧げる事が出來ると思ふ。

扨て獨斷論と批判論とは共に徹底せる一元的なる體系であると云ふ點に本質的なる一致點を有する。換言すれば兩者は共に主觀及び客觀の矛盾の廢除卽ち絕對的同一性に關つてゐると云ふ事、卽唯一なる同一的絕對者を豫想し之れより出發せんとするといふ事に於いて一致する。然し兩者の相違する點は獨斷論は此れを客觀卽ち非我もしくは物に於いて求めんとし、批判論は此れを主觀卽ち自我に於いて求めんとする事、換言すれば獨斷論は主觀を客觀の中に融かし込むに對して批判論は客觀を主觀の中に消失せしめるのである。かくて又獨斷論は當然實在論となり批判論は觀念論となるのである。「自我について」に於いては本體論的な方面から獨斷論の特徵をも、主として主觀、客觀の方面から、詳しく云へば絕對者を客觀に於いて求めんとするもの、若しくは絕對的客觀を想定せんとするものとして考へられたが(Vgl. §2)「哲學的書簡」に於いては更に働きの方面からも考察せられてゐる。卽ち兩體系はそれらが最高として立てる所の目標(チール)によつて異るのではなく、むしろそれへの接近 Annäherung によつてそれの實現 Realisierung によつて、それの實踐的なる要請の精神 Geist によつて異るのである。批判論は最後の目標をば無限なる課題の對象として考察しなければならぬ。批判論が最後の目標を(或る客觀に於いて)實現され

たとして、或は(或る個々の時點に於いて)實現されうるものとして掲げるや否や、それは、それ自ら必然的に獨斷論となる。(Vgl. I. Phil. Briefe, s. 331 ff.)又兩體系は共に絶對的同一性に關係するのであるが、然しその關係の仕方に於いて異ると云ふ事が出來る、卽ち批判論は、直接に主觀の絶對的同一性に關係し、客觀の主觀との一致には唯だ間接に關係するに對して、獨斷論は反對に絶對的客觀の同一性には直接に關係するが、主觀の絶對的客觀との一致には唯だ間接に關係するのである。

又兩體系は共に絶對者を決して理論的知識によつて客觀として捕捉する事は出來ない。批判論の立場は客觀を絶對として考へることには全然反對であり、從つて此れを知識の客觀と見ることも勿論不可能であるが獨斷論にとつても絶對者を客觀として、理論的知識によつて捕捉することは不可能と云はねばならない。何となれば絶對的客觀は絶對なるが故に自らの外に主觀の存在を許さない、然るに理論哲學はあくまでも主觀客觀の對立の上に成り立つが故である。かくて兩體系にとつては唯、絶對者を知識の對象ではなくして、行動作用の對象とする事、或は絶對者がよつて以つて實現される所の行動を要求する事が殘るのみである。

かくて獨斷論は絶對者を實現する所の行動を客觀、卽ち物の行動となし、批判論は

此れを主觀卽ち自我の行動となすのである。前者は從つて物に於ける絕對的活動性、自我に於ける絕對的受動性を想定するに對し、後者はその反對に物に於ける絕對的受動性、自我に於ける絕對的活動性を想定する。換言すれば獨斷論の體系は完全なる必然の體系であり、批判論の體系は完全なる自由の體系である。不變なる自性（ゼルブストハイト）、無制約的なる自由、無制限的なる活動への努力此れが批判論の本質をなすのである。(Vgl. I. s. 335)

かくの如く兩體系には全然正反對なる相違があるのであるが、然し尙詳細に考へて見ると兩體系のかくの如き反對は決して絕對的なる反對ではなくして、むしろ絕對者に到達、もしくは合一せんとする過程に於いて現はれる相對的なる見方の區別と考へる事が出來る。批判論にとつて獨斷論は決して如何にしても破ることの出來ぬ堅き巖でなくして、むしろ外に映されたる自らの影とも見る事が出來る。成程理論的な立場に立つ限り、或は又實踐的な立場に立つにしても部分或は有限の立場、卽ち過程の立場に立つ限りに於いては兩體系は決して融一する事は出來ないと考へられるが、然し絕對的な同一の立場に於いては兩體系も亦融合しなければならぬと思はれる。シェリング自身も屢々云ふ如く兩體系は同じく絕對者を行動の對象

として有し、又同じ問題(絶對的無限者よりの有限者の導出、もしくは基礎づけ)を問題としてゐるのである。從つて勿論兩體系が一度び絶對的立場に立つならば卽ち絶對者を一且捕捉し、それと合一するならば、既に此の點に於いて兩體系は、反對として、融合せられ、合一せられる筈である。成程一應は「必然性」の體系、「受動性」の體系として「自由」の體系、「活動性」の體系としての批判論に對立するとも考へられるが、然し眞の必然は又直ちに眞の自由であり、純粹なる受動は直ちに又純粹なる活動でなければならぬ。兩者は全く一でなければならぬ。「兩體系は主觀及客觀のかの矛盾の廢除に關係する。……何となれば凡ての哲學は凡ゆる綜合の目標として絶對的定立 absolute Thesis を要求する。然るに絶對的定立は絶對的同一性によつてのみ思惟されうるが故である。……然し若し兩體系が人間的知識の完成者としての絶對的原理に關係するならば此の原理は又兩體系の合一點でなければならぬ。何となれば若し絶對者に於いて凡ゆる矛盾が止むならば異つた體系の爭も亦止まなければならない、否むしろ凡ゆる體系は彼の中に於いて矛盾する體系として、は終熄しなければならぬ。若し獨斷論が絶對者を客觀とする體系であるならば、此れは絶對者が客觀たる事をやめる所に於いて卽ち吾々自身が絶對者と合一する所に於いて必然的に終熄し、又

批判論は絶對的客觀が主觀と同一なる事を要求する體系であるならばそれは主觀が主、觀、卽ち客觀に對立するものである事をやめる所に於いて必然的に終熄するのである。」(I. s. 329)

かくてシェリングが此の作に於いて獨斷論、批判論、兩體系の相違點、同一點を極めて明瞭に指摘しつゝ、兩者の特質を叙述せんとしたのであるが、然し兩者の特質が鋭く對立せしめられゝば、せしめられる程、兩者がそれの根柢に於いて立ち、それの根柢に於いて融一する所の絶對的同一性が、ます〳〵強く現はれ出づる事を否定することは出來ない。かくの如く見るならば後には(一八〇一年以後)遙かに明瞭なる形、純粹なる形に於いて、而かも主導的主題として「同一」が說かれてゐる所の所謂同一哲學體系の思想の萠芽を、勿論異つた形に於いてゞはあるが、既に認める事が出來ると思ふ。※ 卽ち最初「相互作用」に於ける內面的統一として現はれた同一性は更に絶對的自我の同一性、卽ち自我と、それによつて產み出された非我との內面的統一として現はれ、次には自我を原理とする批判論と物を原理とする獨斷論との同一性として現はれたと云ふ事が出來るであらう。

扨て然らばかくの如き同一性、或は絶對者は如何にして捕捉せられるか、如何なる

作用によつてかゝる絶對者は理解せられるか。シェリングは此處に知的直觀なる作用を說くのである。最初の作なる「哲學の形式一般の可能性」に於いては、かゝる作用は勿論豫想されてはゐたとしても尙、明かに說かれなかつたが「自我に就いて」に於いては既に明かに說かれてゐる。「自我は決して單なる概念によつては與へられる事は出來ない。何となれば概念は制約せられたるものゝ範域に於いてのみ、客觀によつてのみ可能であるからである。從つて若し自我が概念であるならば、……自我は全然制約せられてゐるであらう。從つて自我は唯直觀に於いてのみ規定せられる事が出來る。然し自我は唯だそれが客觀となる事が出來ないといふ事によつてのみ自我であるが故に、それは決して感性的直觀に於いて規定せられうるものではなく、唯々決して客觀を直觀せず、決して感性的ではない所の直觀、卽ち知的直觀に於いてのみ規定せられうる所のものである。客觀がある所には感性的直觀がある、又その反對である。從つて客觀のない所に於いては、決して感性的直觀はない。從つて全然直觀がないか、或は知的直觀があるかである。※※

※「自我について」に於いても(一卷、百八十頁、註)次の如き言葉によつても、かゝる思想をうかゞふ事が出來ると思ふ。

"Das unendliche Ich würde alles Entgegengesetzte ausschliessen, ohne es entgegenzusetzen."

＊＊I, S. 184, 尙此の外、「絕對的自我は單に形式的なる原理でもなく、理念でもなく、客觀でもなくして、唯知的直觀に於いて絕對的實在として規定せられたる純粹自我である。」I, S. 208

かくの如く自我卽絕對者は唯だ知的直觀に於いてのみ規定せられうる事が主張せられたが、然し尙此の時の知的直觀は、客觀卽ち物に關係するものとしての感性的直觀に對して客觀とならざる主觀卽ち自我の直觀を意味するにすぎなかつた。成程「哲學的書簡」に於いては「存在（ダザイン）」「經驗」への傾向が「自我について」よりも更に强く働いて來たとは云へ、知的直觀をかくの如き客觀を否定せる自我の直觀と見る點に於いては大體に於いて異る所はないと思はれる。唯だ然し前者に於いては上述の傾向の爲めに哲學の出發點としての知的直觀を「經驗——直接經驗（ウンミッテルバーレエルファールングン）」として表はしてゐると共に知的直觀の働きを「吾々に於ける時間的なるもの、變化するもの」に對して「吾々に於ける永遠なるもの」の直觀として考へる樣になつた點が注意せられる。「經驗——然し客觀に關係する凡ゆる經驗は又他の經驗によつて媒介されてゐるが故に——最も嚴密なる意味に於ける、卽ち自ら產出せられ、そして凡ゆる客觀的なる原因性から獨立なる、經驗から吾々の知識は出發しなければならぬ。此の原理のみが——直觀と經驗——死せる魂なき體系に生命を吹き込む事が出來るのである。」（I, S.

318)「時間の變化から吾々の內奧へ、外から附け加はつた所の凡てのものから純なる(外殼を脫がされたる)自己へ還り行き、そしてそこに於いて「不可變性」の形式のもとに於いて、吾々に於ける永遠なるものを直觀する所の隱れたる不可思議なる能力が吾々凡てにひそんでゐる。此の直觀は最も內面的な最も本來の直觀であつて、吾々が叡知界に關して知り又信ずる所の凡てのことは唯々此れに依存するのである。」此の「永遠なるものゝ直觀」といふ點に於いて後の思想への發展の柢種を見出し得ると思ふのであるが、然し又「吾々に於ける」といふ限定に於いて、さきに同一性に關して述べたと同一なる制限を感ずるのである。卽ち此の知的直觀は吾々卽ち自我の本質の直觀であつて、決して個別的なる」特殊なる事物卽ち自然の本質の直觀ではないと云ふ事である。而してシエリングによれば此の直觀こそ或物が眞に「在る」として吾々に確信せしめる所のものであつて、他の凡ゆるものは單に現象するにすぎないものである。卽ち感性的直觀の客觀の如きは如何に直接らしく見ゆるも、單に見ゆるのみであつて眞の存在を示さない、眞の實在性は唯知的直觀のみにあるのである。而かも感性的直觀は常に客觀の必然力に縛られるのであるが、知的直觀は唯自由によつて產出されるのである。然し勿論此の自由は意識されたる自由ではあり得な

い。何となれば意識は反省を豫想するが反省は、それが向ふべき、或は歸り行くべき客觀を豫想し、從つて決して客觀に向はざる知的直觀はかゝる意識とは區別されなければならぬであらう。唯感性的直觀の如く客觀力に縛られざる限りに於いて、自由と云ひ得るのみであらう。卽ち絕對的自由であつて、必然の意識客觀の意識と對立したる意味での自由ではない。無限なる絕對的自我に於いては道德法はなくなり、全く存在の內面的必然より出づる所のもの、卽ち、云はゞ自然法とかはり*從つてその限りに於いて道德法にもとづく所の自由の意識も消失するであらう。かくの如き知的直觀はかくて、成程普通の意味に於いて意識はされない、**が然し此の云はゞ無意識なる知的直觀が凡ての意識の、凡ての行動の、又凡ての明證の基礎でなければならない。

* Vgl. I. S. 198 當爲の法則と自然法則との合一である。

**既に「自我について」百八十頁に見ゆ。

此の知的直觀についてはフイヒテも亦後に*„Zweite Einleitung"„Versuch einer neuen Darstellung der W. L."に於いて詳細に說いてゐる。彼に於いても自我は決して概念、もしくは經驗的事實ではなくして事行 Tathandlung である、成程哲學者にとつては事

實となるが、根源的自我そのものにとつては事行でなければならぬ。(I. s. 465) 然らば何故哲學者にとつては事實であるか、彼は知的直觀に於いて自我を捕捉するが故である。自我は知的直觀に於いてのみ與へられる、或は知的直觀そのものが自我である (II. s. 529) とも云ひ得るのである。此の直觀に於いて始めて自我は自らを、卽ち自我が行動すること、自我が行動する所のものを識るのである。此れは最も直接なる意識であつて、此れに於いては勿論主觀的なるものと客觀的なるものとが不可分離に結合され絕對的に同一である (I. s. 528 f) これは單に質料的なる存在(ベシュテーン)に關係する如き直觀ではなくして純なる活動の直觀である、それは決して、停止せず進行するもの、存在(サイン)ではなくして生命(レーベン)である。カントは極力知的直觀を排斥したのであるがフィヒテによればそれは、自我以外の物自體に關する直觀であつて決してかくの如き知的直觀ではない。此の活動、卽自我の直觀はむしろカント自身も豫想してゐた所の——純粹統覺の意識に於いて、或は更に斷言命令の意識に於いて——ものである。此の意味の知的直觀は凡ゆる哲學にとつて唯一の確實なる立場である。(I. s. 466)

* フイヒテの Grundlage d. gesammten W. L. は一七九四—五年に出版されてゐるが此れには事行なる概念は說かれてゐるが

知的直觀は尙明かに說かれてゐない。シエリングの „Vom Ich" "Phil. Briefe" は共に一七九五年に出版せられた。二年おくれて一七九七年にフイヒテの Erste u. Zweite Einleitungen in die W. L. 及び Versuch einer neuen Darstellung d. W. L. が出た。

以上の如くフィヒテの知的直觀も、シエリングが「自我について」及び「哲學的書簡」に於いて說く所と大體に於いて同一と見る事が出來るが、然しフィヒテは常にその重心をあくまでも活動におくに對して、シエリングは自我の本質に於いてもそれの存在の方面を重視し、* 從つて知的直觀に於いても「活動」の直觀としてよりも「永遠なるもの」の直觀——勿論此の永遠なるものが活動的でないと云ふのではないが、此れに於いて吾々は單なる活動卽ち無限なる努力よりも、むしろ絕對者の靜寂なる姿を見る樣に思はれる。「私がもし知的直觀を繼續するならば、私は生きる事を止めるであらう。私は時間より永遠へ行くであらう。」Würde ich die intellektuale Anschauung fortsetzen, so würde ich aufhören zu leben, Ich ginge „aus der Zeit in die Ewigkeit." ——として說かれてゐる樣に思ふ。

* 例へば I, S. 202 „Seine" (des Ichs) Uriform ist die des reinen ewigen Seins." I. S. 167, „Das Absolute kann nur durch das Absolute gegeben sein, ja wenn es absolut sein soll, muss es selbst allem Denken und Vorstellen vorhergehen.

以上は知的直觀そのものについてゞあるが、此れと反省或は思惟との關係につい

て考察する時兩者の相違は更に著しく現はれる樣に思はれる。フィヒテは抽象或は反省の働きを決してシェリングの如く單なる手段として輕視せずむしろ非常に高め、それの持つ眞の價値を見出したと云ふ事が出來る。彼は絕對的な自我が自己自身によつて、自身を定立するものとしてのかの作用に於いて、反省作用と直觀作用とが緊密に結びついてゐるものとして意識してゐる。卽ちそこに於いて抽象作用と反省作用に基づいたる直觀作用を、否むしろ直觀作用にもとづいたる抽象及反省の作用を完成したのである。又その他概念の作用も直觀の作用そのもの――靜止、限定の姿に於ける直觀と考へる。「靜止の相に於いて捕捉せられたる內面的活動(自我の直觀)が概念と呼ばれる。自我の直觀と必然的に結びつき、そしてそれなしには自我の意識が成立しない所のものは、自我の概念である。何となれば概念が始めて意識を完成しそして包括するが故である。」Vgl. I. s. 533)

然るにシェリングは此れと反對にむしろ兩者を引き離さんとし、そして抽象と反省とは正當に價値づけられずに終つたのである。從つて概念もしくは反省とそれが捕へんとするもの、卽ち直觀との間には越ゆべからざる間隙が作られた。その爲めに直觀そのものに、殊に方法論的自覺が强まるに從つて、反省作用が有すべき働き

をも與へられるに至り、直觀そのものゝ多義性を來たしたと思はれる。尙此れらと關係してフィヒテに於いては明かに區別せられた定立作用の二種、卽ち絕對的な自我自身の自己による定立(此れは決して分離ではない)と凡ての感性的、經驗的直觀及思惟並びに經驗的感性的な意欲よりの分離の作用としての、第一の根本命題にまで高められた定立、換言すれば、根本命題の定立(分離)と根本命題によつて定立せられる所の絕對的自己定立、との間の間隙をシェリングは初めから充さうとした、否むしろ看過し飛躍した。彼はフィヒテが分離したものを合一せんとする。フィヒテの反省は無限の努力による、經驗的なるものよりの分離、離脫、從つて經驗的なるものより自由となることであるが、シェリングは最初の出發點より、此の分離の分離、此の離脫の離脫、要するに倫理的觀念論の拒非をめざしてゐたのである。*

* Vgl. Kroner, op. cit., S. 544 f.

扨て此の絕對的自由、絕對的淨福の狀態なる知的直觀から吾々は云はゞ忽然として、死の狀態からめざめるのである。客觀なく反對なき知的直觀に於いては働は尙ほ自己に還らない、自己の意識を有しない。働が自分自身に還ることによつて始めて意識 Bewusstsein が生ずる。此の働き、卽ち必然的なる、自己自身への還歸が反省 Refle-

tion である。然し反抗(ウイーダーシュタンド)なしには還歸(ルユックケール)は考へられず、客觀なしには反省は考へられない。かくて反省には必ず客觀が對立しなければならぬ。客觀の意識がなくなる時始めて反省の働も止み、從つて又絕對的なる知的直觀の狀態に歸るであらう。自覺の働きさへも自らを意識する、卽ち自らを客觀として反省する働と考へられる限り、それは知的直觀とは明かに區別されねばならぬ。知的直觀は絕對的同一性としてむしろかくの如き意味の自覺の根柢でなければならぬ。

扨て夫々多少相違の點を有するとしても大體に於いて一つの時期にあるものとして以上の諸作を考察して來たのであるが、もう一度それらの一般的共通的特徵を述べるならば先づ第一にカントの批判哲學に比すれば著しく形而上學的であると云ふ點である。「先天綜合判斷は如何にして可能であるか。」と云ふ批判主義の問題提出は「絕對者は如何にして自らより出で行き、世界を自らに對立せしめる事が出來るか」或は「吾々は、吾々に或物を絕對的に對立せしめんが爲めに、絕對者より如何にして出づるか」といふ思辨的な問題に置き代へられると共に、又一方此れらの問題は單に主觀及客觀の論理的な問題としてゞはなく、直接なる存在に關係せしめられたの

である。「凡ての哲學の主要なる仕事は「世界の存在(ダザインデルウエルト)」の問題の解決である。」(I. s. 313)

次に此の期の思想の特徴としては「自然への無關係」と云ふ事である。成程哲學の原理を諸科學の原理の基礎として考へてはゐるが*然し特殊的自然、特殊的科學への關心は尙極めて薄弱であつたと云ふ事が出來る。特殊的自然への此の傾向は一七九七年以後の自然哲學の時期に至つて著しく現はれるのであるが、然し勿論此の期に於いても皆無と云ふのではない。殊に「哲學的書簡」に於いては僅かながらかゝる思想への動きを見こるとが出來る。

* I. S. 91

又「自我について」「哲學的書簡」の兩著作は共に絕對者、無限者を有限者の基礎と考へる事は考へるにしても、そこに多少立場の相違が存する樣に思はれる。先づ「自我」の立場は尙無限なるもの、絕對的なるものゝ立場であるかゝる立場より有限なるものを導出さんとするのである、絕對者より相對者へ無限者より有限者へ向ふのである。然るに「哲學的書簡」の立場は既に絕對者そのものゝ立場ではない。絕對者そのものの立場に立つならば既に述べた如く批判論、獨斷論と云ふ立場の區別さへも消失しなければならぬであらう。從つて此の作の立場は、更に正確には出發點は絕對者そ

のものゝ立場を離れ、むしろ有限なるものゝ立場に轉出してゐると云はなければならぬ。而して絶對者は此の場合此の立場の向ふべき理想として、最後の目標として輝いてゐると考へられる。かくて此の作に於いては有限者より無限者へ、相對者より絶對者へ向ふと云はなければならぬ。此の場合哲學の若しくは思辨の關心事は勿論有限より無限への移り行き、卽ち無限なる理念の實現であつて、無限より有限の導出ではない。「哲學は成程、無限者から有限者へ移り行く事は出來ないが、然し反對に有限者より無限者へ移り行くことが出來る。」(I. s. 314) 此處に明かに有限と無限との間に一つの溝が作られてゐるのを見ることが出來る。批判論の立場は有限なるものが無限なる過程を通じて絶對者に合一せんとする努力の立場である。此の立場に於いてそして此の過程に於いてのみこれは獨斷論に對立するのである。而して此の批判論の立場に於いても有限なるものそのものに既に無限なるものへの傾向、無限なるものに自らを失はんとする永遠なる努力が、ひそんで居り(Vgl. I. s. 315) そして此の事の爲めに批判論の立場に立つ哲學が有限なるものより無限なるものへ移り行くことが出來るのであるが、然し乍ら、有限なるものに如何にして無限なるものへの傾向が存するのであるか、かくの如き有限が如何にして可能であるか。も

しかくの如き有限を許すならば成程哲學にとつて不可能であるとしても何らかの意味に於いて無限なるものより有限なるものへの移り行きを認めなければならぬであらう。かくて「自我」に於いてとられたる無限者より有限者への移り行きを不可能として「哲學的書簡」に於いてはその反對に有限者より無限者に移り行かんとしたのであるが、然し嚴密に考へるならば如何に無限に此の過程を進めるにしても、既に豫め有限者の中に無限者への傾向がなければ、換言すれば無限者が有限者の中に移り行き、或は前者が後者の中に實現されてゐなければ、此の事は不可能であらう。即ち「哲學的書簡」の立場は必然に「自我」の立場を豫想する。然るに「自我」の立場について考へて見れば、無限者そのものには有限者はない。從つて無限者より有限者への移り行きには、必然に無限者の立場を轉出しなければならぬ、即ち有限者の立場に出でなければならぬ。然し有限者の立場に立つ以上は無限者よりの導出は不可能となり、無限者は唯だ無限なる努力の對象、即ち理念となるであらう。かくて嚴密に云ふならば單なる有限者の立場は、單なる無限者の立場と同樣に、その目的に對して全く無力であると云ふ事が出來る。故に吾々は批判論の有限者より無限者への移り行きを承認すると共に此の立場の根柢として、本體論的な「自我」の如き立場、無限者より

有限者への移り行きをを承認しなければならぬ。從つて「哲學的書簡」の無限者より有限者への移り行きは不可能であるといふ事は、論理的な移り行きではない、もしくはかくの如き移り行きは概念(ベーグライフェン)することが不可能である、理解を超越してゐる、といふ意味でなければならぬと思はれる。同じ樣に此の有限者より無限者への移り行きも勿論理論的な立場で論理的に完成されるべきものではない、實踐的な立場に於いてさへもむしろ無限の努力である。批判論の立場に於いては此の合一はあくまでも理念でなければならぬ。然し乍ら理念であると云ふ事は必ずしも全然合一されぬ、合一は全く空虛な理想にすぎぬと云ふのではなく、既にも指示した如く極微的な意味に於いて常に合一が實現され完成されてゐることを意味してゐるのである。

とにかく然し此の作(哲學的書簡)が無限者より有限者への移り行きを無條件に肯定せず、そこにかすか乍らも一つの溝――それが餘り淺かつたが爲めにそれの深き意味が認められずにやがて又埋められてしまつたとは云へ――を掘つたと云ふ事は方法論的に見て可成り重要な意義を有すると思はれる。そして此の事の眞の意義は後期の積極哲學の時期に於いて初めて明かとなるのである。

尙、最後にシエリング哲學の重要なる意義を自然哲學及それ以後の發展に見出さ

んとする考方*について一言のべて見たいと思ふ。此の考方にも勿論一理はあると思はれる。成程歴史的位置より見てシエリングの自然哲學はフィヒテ哲學に對して著しい發展であり、歴史的に重大なる價値を持つてゐるには相違ないが、然しその爲めに、此の自然哲學以前の諸作は、歴史的には殆んど意味を認められず、全然フィヒテの追隨期であり獨創的のものではないと考へる事は正當ではない。此の時期は勿論フヒテの影響の著しく認められる時期ではあるとしても、今迄考察せる如く、既に彼自身の特徴も明かに看取せられ、そして更に後の思想への發展のモメントも充分に見出すことが出來るのである。而して一般哲學發展史に於けるシエリングの考察ではなくして、特に彼自身の思想發展の考察を主題とする此の研究に於いては此の初期の考察が甚だ重要なる意味を有する事は自ら明かであると思はれる。(未完)

* 普通の哲學史の考方は殆んど皆此の考方と云つてもよい。
N. Hartmann, Die Philosophie des deutschen Idealismus Cassirer, Erkenntnisproblem III. などもそうである。